地域医療を守り育てる住民活動全国シンポジウム報告

ともし続けよう　地域医療の灯（ひ）！支えよう　みんなの“わ”で！

令和 5 年 12 月 3 日（日）、「地域医療を守り育てる住民活動全国シンポジウム 2023」をハイブリッド形式にて開催しました。当日は現地会場である自治医科大学地域医療情報研修センター大会議室に 15 名の方にお越しいただき、オンラインでは、ご自宅や勤務先、視聴会場など、各地から 46 名の方にご参加いただきました。ハイブリッド形式でのシンポジウム開催は初めてでしたが、大きなトラブルも無く全プログラムを終えることができました。

1. 開会挨拶・主催者挨拶

世話人を代表し、小谷和彦氏（自治医科大学地域医療学センター地域医療学部門教授）から開会の挨拶をいただきました。続いて、主催者を代表し、佐藤清美事務局長が挨拶をいたしました。

2. 趣旨説明・パネルディスカッション

今回のシンポジウムは昨年に引き続き「医師の働き方改革」をテーマといたしました。プログラムの後半に行うグループワークに繋げるため、3 名のパネリストにご登壇いただき、「医師の働き方改革」とはどのような制度なのか、昨年の振り返りも兼ねご発言いただきました。

福田政憲氏（宮崎県北の地域医療を守る会事務局長）の進行のもと、まず藤本幸男氏（青森県立保健大学看護学科特任教授）にご発言いただきました。藤本氏は今回の参加者の半数が初めての参加ということを踏まえ、本シンポジウムの経緯、目的の他、「医師の働き方改革」というテーマにどのように繋がってきたのかについてお話をされました。

次に昨年のシンポジウム内容の振り返りとし

まして、久保田健太郎氏（千葉市職員）にご発言いただきました。久保田氏は昨年の基調講演の内容とその後のディスカッションの内容を簡単にまとめてくださり、「医師の働き方改革は、これをやれば解決するという答えがあるわけではなく、医療専門職と住民が自分事として捉え、考え続けなければならないテーマである」という認識が参加者の間で共有されたと述べられました。

3 番目にご発言いただいた小松憲一氏（茨城県西部メディカルセンター内科部長）は昨年に引き続いてのご登壇でした。昨年は現場で働く医師の立場としてリアルな勤務の実態をお話いただきましたが、今回は改革施行を半年後に控えた現在の状況、現場ではどうのように対応していこうとしているのか、今後どのようなことが問題になってくる可能性があるのかについてお話をされました。

ディスカッションの最後には、「医師の働き方改革」を危機と捉えるのではなく、日本の医療全体の新しい時代の始まりであると前向きに捉える視点が大切であるというお話がありました。45 分という短い時間でしたが、グループワークで「自分たちにできること」を議論するうえで参考になったのではないかと思います。

3. グループワーク

会場は 2 グループ、オンラインは 5 グループに分かれ、「2024 年 4 月に医師の働き方改革施行が迫る中、私たちには何ができるか」をテーマにグループワークを行いました。「医療者のできるコト」「行政のできるコト」「市民・企業のできるコト」をメンバーで考え出し、集まったできるコトを分類、整理しながらひとつの「宣言書」を作成していただきました。会場にて対面で行うグループワークは 4 年ぶりでしたが、少人数を感じさせない程、とても活気ある議論が行われていました。オンラインのグループワークは Zoom のブレイクアウトルーム機能を利用してのワークでした。対面とは違い、議論をしづらい状況であったかと思いますが、どのグループも「宣言文」を完成さることができ、参加者の皆さんの対応力の高さを感じました。

4. グループワーク発表

パワーポイントで作成いただいた宣言文を画面に写しながら、各グループの代表者に議論した内容について発表していただきました。

5. 閉会挨拶

矢壁敏宏氏（NPO 法人まちづくり雲南理事長）から閉会の挨拶をいただいた後、参加者全員で写真撮影（冒頭の写真）を行い終了となりました。

総合司会は藤原真治氏（美馬市国民健康保険木屋平診療所長）に務めていただきました。